

朝のあかり 石垣りん著 中公文庫

河田慶子

石垣りんは戦前戦中戦後と生きて、その間数々の詩と散文を発表してきた日本現代詩人のひとりである。

1920年（大正9年）に東京赤坂に生まれ1934年（昭和9年）に高等小学校を卒業すると、自由に好きなことをしたいと14歳で丸の内の東京興業銀行に事務見習いとして勤めた。

小学校のころから作文などが好きで、詩を投稿していたので、銀行に入ってから少しずつ詩や散文を同人誌に投稿してその作品が少しずつ認められるようになった。

著書『朝のあかり』は、りんの詩作を織り込んだ散文集であるが、職場で働く人々や自身の身の回りの生活について率直に表現していった。

空襲で家を焼かれてちいさな借家に祖父、父、継母、障害のある2人の弟と住むようになってからは一家の生活をりんひとりが背負うことになった。

生活のつらさはりんを一層詩作に向かわせたのではないだろうか。

『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』『表札』などが代表作であるが、りんは厳しい目ばかりでなく、弱い立場に置かれている人にあたかなまなざしを持っていた。

〈「もう雨はやみましたか？」と尋ねられた。ああこの人は朝来たまま空を見ていないのだ。私の耳の中で言葉がやさしく濡れてきた。〉『雨と言葉』から

銭湯で明日嫁入りする女性に襟元を剃ってくれるよう頼まれたりんは、〈美容院へも行かずに済ます、ゆたかでない人間の喜びのゆたかさが湯気の中で、むこう向きにうなじをたれている、と思った。〉『花嫁』から

一方エリート層にみられるひとりよがりの傲慢さに対しては厳しい目を向けている。

『よい顔と幸福』『生活の中の詩』

田村俊子賞、H氏賞、地球賞など受賞したが、「ただ生きて、働いて、物を少し書きました。それっきりです。」と謙虚に語っている。

2004年（平成16年）東京都杉並区の浴風会病院にて永眠 84歳

りんにとって詩を書くことは呼吸することと同じなではなかったか。

定年までひたすら働き続けたりんの内面の想いがあふれている作品だと思う。